校註 方丈記

永積安明編

武蔵野書院刊

校註 方丈記

——大福光寺本——

永積安明編

武蔵野書

昭和十四年六月五日印刷
昭和十四年五月十日発行
昭和三十五年一月二十日　廿八版発行

校註方丈記

定価　三〇円

編者　永積安明
東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行者　前田武
東京都文京区白山御殿町十八
印刷者　柿崎忠一郎

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行所　合名会社　武蔵野書院
電話東京(291)四八五九番
振替口座東京六七一四六番

凡例

一、本書は高等專門諸學校の國語科教科書及び新制高校の上級用副讀本たるを主眼とし、併せて一般の講讀に資するため編纂しました。

一、本書は國寶大福光寺本方丈記を底本とし、本文中誤脫と認められ、或は參考に供しうる部分を、三條西伯爵家藏本（略號・「三」）前田侯爵家藏本（「前」）鈴木朖舊藏本（「鈴」名古屋圖書館藏）の三本を以て補正又は指示し、夫々頭註として上欄に明記しました。

一、本書は底本・校合用諸本を出來るだけ原典のまゝ用ゐましたが、教科書としての性質から、底本の片假名を平假名に改め、假名遣・送假名・漢字の用法等を正し、假名には適宜漢字をあて、句讀點、濁點を施しました。

一、校合以外の頭註は簡略なもののみとし、補註篇でその缺を補ひました。補註の活用は、學習者の程度に應じ、教授者諸賢の取捨及び御指導に俟ちたいと思ひます。

一、參考篇は最も重要な「池亭記」と「十訓抄」とのみにとゞめましたが、他の副次的參考資料については、頭註及び補註（本文中△洋數字で示したもの）において、夫々註記しました。

一、註記に古註を引用した場合には、夫々左の符號を用ゐました。

(1)首書方丈記（首）
(2)方丈記諷說（諷）
(3)方丈記盤齋抄（盤）
(4)方丈記諺解（諺）
(5)方丈記流水抄（流）

一、校合用の諸本は、底本に用ゐた國寶本について、方丈記諸傳本中、最も信據するに足る善本ばかりでありますが、その撰定にあたつては、鈴木知太郎・池上義雄兩氏に多大の御援助を得ました。これら諸本御所藏の方々へと共に、厚く感謝の意を表します。

昭和十三年十二月　　校訂者識

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

校註方丈記目次

方丈記……一
附錄
補註篇……三六
參考篇……四一
國寶大福光寺本寫影……卷頭

ゆく河のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつむすびて、久しくとゞまりたるためしなし。世の中にある人と栖と又かくのごとし。玉敷の都のうちに棟をならべ、甍をあらそへる高きいやしき人のすまひは、世々をへてつきせぬ物なれど、是をまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年燒けて今年つくれり、或は大家ほろびて小家となる。すむ人も是に同じ。ところもかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中にわづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。不知、

一、人の身のはかなき事にうたかたをたとへたりうたかたは水のあわのことを云へり。（れい）

二、とゞまりたるためし―とゞまる事（三）（前）（鈴）

三、つくれり―つくり（三）（前）

四、たゞ（三）（前）（鈴）―底本ただ下損傷シテ不明。

うまれ死ぬる人、いづ方より來りて何方へか去る。又不知、かりのやどり、たが爲にか心をなやまし、なににによりてか目をよろこばしむる。そのあるじと栖と無常をあらそふさま、いはゞあさがほの露に異ならず。△4或は露おちて花のこれり。のこるといへども朝日にかれぬ。或は花しぼみて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。

予ものの心を知れりしより、(一)四十年あまりの春秋をおくれる間に、世の不思議を見る事やゝたびく〳〵になりぬ。△5去安(二)元三年四月廿八日かとよ。風はげしく吹きて、しづかならざりし夜、(三)いぬの時ばかり、都の東南より火いでゝ西北に

一、より―よりこのかた(三)

二、安元三年―高倉天皇の御代、此の年八月治承と改元。△6

三、今の午後八時頃。

一、長安南面皇城門、是謂二朱雀門一。（拾芥抄）

二、朱雀門内正面にあり、天子が即位朝賀の大礼を行はるゝ正殿。

三、式部省に屬し、紀傳・明經・明法・算道を教授し、又是に關する事務及び釋典の事を掌りたる所。

四、八省の一、人口・戸籍・租税等の事を掌る。

五、舞人―病人（三）（鈴）―まひ人（前）

六、火（三）（前）（鈴）―日（底）

七、眩れて、目がくらんで。

至る。はてには朱雀門(一)・大極殿(二)・大學寮(三)・民部省(四)などまでうつりて、一夜のうちに塵灰となりにき。火もとは樋口富小路とかや、舞人(五)をやどせる假屋よりいできたりけるとなん。吹き迷ふ風にとかく移りゆくほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風にたへず、吹ききられたるほのほ飛ぶが如くして一二町を越えつゝ移りゆく。其中の人うつし心あらむや。或は煙にむせびてたふれ伏し、或は焔にまくれてたちまちに死ぬ。或は身ひとつから(七)

一、金・銀・琉璃・玻璃・珊瑚・硨磲・碼瑙の七種珍寶。

二、摂政・關白・大臣を公といひ、三位以上及び參議を卿といふ。

三、そのほか―そのほかは（鈴）

四、安德天皇の御代。△7

四、中御門とは一條通より下ル六ツめの横通也、京極とは東のはしの竪通なり。（鈴）

六、吹ける―いかめしく吹ける（三）（前）（鈴）

七、こもれる―その中にこもれる（三）（前）（鈴）

うじて通るしも資財を取出るに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。其のたび公卿の家十六やけたり。ましてそのほかかぞへ知るに及ばず。惣て都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數十人、馬牛のたぐひ邊際を不知。人のいとなみ皆愚かなるなかに、さしもあやふき京中の家をつくるとて、寶を費し心をなやます事は、すぐれて味氣なくぞ侍る。又治承四年卯月の比、中御門京極のほどより大きなるつじ風おこりて、六條わたりまで吹ける事侍りき。三四町を吹きまくる間にこもれる家ども、大きなるも小さきもひとつとしてやぶれ

ざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱ばかりのこれるもあり、かどを吹きはなちて四五町がほかにおき、又垣を吹きはらひて隣とひとつになせり。況や、家のうちの資財かずをつくして空にあり、檜皮・葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹きたてたれば、すべて目もみえず。おびたゞしくなりとよむほどに、もの言ふ聲もきこえず。彼の地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡せるのみにあらず、是をとりつくろふ間に身をそこなひ片輪づける人かずも知らず。この風ひつじさるの方に移りゆきて、多くの人の歎きをな

一、かど―門の上（三）（前）（鈴）
二、あり―あがり（三）（鈴）
三、ほどに―音に（三）（前）（鈴）
四、劫風。惡業所感の猛風。
五、ひつじさる（鈴）―ひつじ（底）未申。西南の方向。
六、を（三）（前）（鈴）―底本ニナシ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

せり。つじ風は常に吹く物なれどかゝる事やある。たゞ事にあらず。さるべきもののさとしかなどぞ疑ひ侍りし。又治承四年みな月の比、俄かに都うつり侍りき。いとおもひの外なりし事なり。大方、此の京のはじめを聞ける事は、嵯峨の天皇の御時都とさだまりにけるより後、既に四百餘歳をへたり。異なる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、是を世の人安からずうれへあへる。實に理にも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、帝よりはじめ奉りて大臣・公卿皆悉くうつろひ給ひぬ。世につかふる程の人、誰か一人ふるさとに殘り居らむ。官・位におもひをかけ、主君のかげ

一、福原遷都。△8
二、平安京。
三、桓武天皇の第二王子。但し平安奠都は桓武天皇の延暦十三年であつた。
四、四百餘歳―數百歳(三)(前)
五、實に―さま(三)(前)(鈴)
六、安德天皇。
七、平安城。(諺)
舊都。
八、筑波ねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにまさるかげはなし。(古今集・東歌)

をたのむ程の人は、一日なりとも疾くうつろはむとはげみ、時を失ひ世にあまされて、期する所なきものは、愁へながらとまり居り。軒をあらそひし人のすまひ日をへつゝ荒れゆく。家はこぼたれて淀河にうかび、地は目の前に畠となる。人の心みな改りて、たゞ馬くらをのみおもくす。牛車を用する人なし。西南海の領所をねがひて東北の庄園をこのまず。その時おのづから事のたよりありて、津の國の今の京にいたれり。所の有樣を見るに、其の地ほどせばくて條里をわるにたらず。北は山にそひて高く、南は海近くてくだれり。浪の音常にかまびすしく、鹽風ことにはげし。

一、武士のわざを好むことをいへり。（盤）
二、領所―所領（鈴）
三、莊園。
四、攝津國福原京。
五、「其の地……そひて高く」（三）（前）（鈴）―底本ニナシ。
六、條起レ從レ北、行ニ於南。里起レ從レ西、行ニ於東。三十六町爲ニ一里、六里爲レ條。（拾芥抄）△10

一、荒削りの丸木で作つた假御殿の意。「朝倉や木の丸どのに我居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ。」（天智天皇）

二、き（三）（前）（鈴）―底本ナシ。

三、公卿朝服の略式。袍を著、冠を被り、指貫をはく。

四、狩衣。

五、元來は武家の常服。

六、ひなびたる（三）（前）（鈴）―ひなたる（底）

内裏は山の中なれば、彼の木のまゝどのもかくやとなかゝやう變りて、いうなるかたも侍りき。（一）（二）日々にこぼち、川もせに運びくだす家、いづくに作れるにかあるらむ。なほむなしき地はおほく、つくれる屋は少なし。古京はすでに荒れて、新都は未だならず。ありとしある人は皆浮雲のおもひをなせり。もとよりこの所にをるものは、地を失ひてうれふ。今うつれる人は、土木のわづらひある事を歎く。道のほとりを見れば、車にのるべきは馬にのり、衣冠・布衣なるべきは多く直垂を着たり。（五）都の手振りたちまちに改りて、たゞ鄙びたるものゝふにことならず。（六）世の亂るゝ瑞相と

一、かきける—かきをける(三)(鈴)

二、堯之有二天下一也、堂高三尺、采椽不レ刮、茅茨不レ剪。(史記)堯帝の德を稱せる故事による。

三、仁德天皇の御仁政。

四、安德天皇の御代。△13

五、とか—かとよ(三)(前)(鈴)

六、おぼえず—たしかにもおぼえず(三)(前)(鈴)

かきけるもしるく、日をへつゝ世の中うきたちて、人の心も(一)をさまらず、民のうれへ終に空しからざりければ、おなじき△12年の冬なほこの京に歸り給ひにき。　されど、こぼち渡せりし家どもは如何になりにけるにか、悉くもとの樣にしも作らず。　傳へきく、いにしへの賢き御世には、あはれみを以て國を治め給ふ。　すなはち殿にかやふきて(二)其の軒をだにとのへず、煙のともしきを見給ふ時は、かぎりあるみつぎ物(三)をさへ許されき。　是民を惠み、世を扶け給ふによりてなり。今の世のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。　又養和の(四)ころとか、久しくなりておぼえず。(五)(六)　二年が間世の中飢渇

して、あさましき事侍りき。　或は春夏ひでり、或は秋大風、洪水などよからぬ事どもうちつゞきて、五穀ことゝくならず。　空しく（一）春耕し夏うゝるいとなみありて、秋苅り冬をさむるぞめきはなし。　是によりて、國々の民、或は地をすてゝ境を出で、或は家を忘れて山に住む。　さまゝの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれど、更にそのしるしなし。　京のならひ、なにわざにつけても、みなもとは田舍をこそたのめるに、絶えてのぼる物なければ、さのみやは操もつくりあへん。　念じわびつゝさまゝの財物（たからもの）かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見つる人なし。　たまゝか

一、空しく春耕し（前）（鈴）―底本ニハナシ。

二、米穀材木薪等の類も皆田舍より上るをたのむ也。（首）

ふる者は、金をかろくし粟をおもくす。乞食路のほとりに多く、うれへ悲しむこゑ耳にみてり。前の年かくの如くからうじて暮れぬ。明る年は立ちなほるべきかと思ふ程に、あまりさへ疫癘うちそひて、まさゞまにあとかたなし。世の人みな病死にければ、日を經つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへにかなへり。はてには笠うちき足ひきつゝみ、よろしき姿したる物、ひたすらに家ごとに乞ひあるく。かくわびしれたる者どもの、ありくかと見れば、すなはち倒れふしぬ。築地のつら、道のほとりに飢ゑ死ぬる物のたぐひ數も不レ知。取捨つるわざも知らねば、くさき香世界にみ

一、あまりさへ―あまさへ（前）
二、やみしにければ（三）―けいしぬれば（底）
三、「往生要集」に引用せる、「佛說レ頌曰、是日已過命則衰減如二少水魚一。」によれるか。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo